Tsukuba Psychological Research
2006, **32**, 63-72

就職に関する予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想を測定する尺度の作成

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科　植村みゆき

筑波大学心理学系　桜井　茂男

Construction of expectation, positive fantasy, and negative fantasy scales related to job-hunting in university students

Miyuki Uemura and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The first purpose of this study is to construct expectation, positive fantasy, and negative fantasy scales related to job-hunting in university students. The second purpose is to examine the reliability and validity of the scales. Data were collected from 342 university students. The factor analysis revealed that expectation, positive fantasy and negative fantasy consisted of one domain. The expectation scale consists of nine items and both the positive and negative fantasy scales each consist of ten items. Analyses involving Chronbacha's α and two-week retests indicated that the reliability of the scales is sufficiently high. The validity of the scales was confirmed using a scale from the Career Decision-making Self-Efficacy and Life Orientation Test.

Key words: 予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想，就職

問題と目的

我々は，目標について考える際，「自分にはその目標を達成できるだけの能力はあるか」「目標の難易度はどの程度か」「目標達成をサポートしてくれる人はいるか」など，目標達成に関わるさまざまな要因を考慮しながら，その目標が達成可能か否かについて考える。一方，目標達成の可能性には関わらず，「こうなりたい」「こうはなりたくない」といったように，その目標について漠然とイメージする場合もある。

目標や将来に関して，その過程にあるさまざまな要因を考慮して，達成可能性について具体的に考えることと，結果のみに思いを巡らしたり，漠然とイメージしたりすることとは区別して考える必要がある。Oettingen & Mayer (2002) は，将来に対する信念と，将来の出来事を描いたイメージとを区別して考えるべきであるとし，予期 (expectation) と空想 (fantasy) という２つの考え方を提唱した。

予期とは，ある出来事が生起する可能性についての判断を伴う，目標や将来についての考え方である。予期は，ある行動をとることができるか否か (self-efficacy expectations)，ある行動が望ましい結果を導くか否か (outcome expectations)，ある出来事が生じるか否か (general expectations)，一般的に未来がポジティブかネガティブか (generalized expectations) によって概念化されると考えられている (Oettingen & Mayer, 2002)。また，予期の形成においては，過去のパフォーマンスとその結果，観察された他者の行動，重要な他者からの評価，生理的・感情的状態が影響を及ぼすと考えられている (Bandura, 1977; Mischel, 1973; Mischel, Cantor & Feldman, 1996; Olson, Roese & Zanna, 1996)。また，このような要因に加えて，ソーシャルサポート

の有無などの目標達成に関連する環境的要因，目標の難易度についての判断，目標達成の方略を知っているかどうかなども，予期の形成に影響を及ぼすであろう。すなわち，自己の能力や，目標の特性，環境的要因といった，目標達成に関連するさまざまな要因に基づいて，「自分は目標を達成する可能性が高いだろう」あるいは「目標を達成する可能性が低いだろう」という予期が総合的に形成される。

一方，空想は，漠然としたイメージとしての，目標や将来についての考え方である。これは，次々と生じるとりとめのない将来についての想像として経験される。目標を達成できるか否かに関わらず，将来望ましい結果を得た自分について想像したり，目標達成を阻害する要因についてあまり考えずに，スムーズな目標の達成をイメージすることは，この空想にあたる。また，空想は，過去の経験や自己評価などではなく，個人の願望や理想に規定されていると考えられている。すなわち，願望や理想に基づいて，「こうなりたい」という理想的な自分についてのポジティブな空想や，「こうなりたくない」という否定的な自分についてのネガティブな空想が形成される。

青年期は，認知的能力の発達を基盤として，より遠い未来や過去の事象について考えることができるようになるとともに，現実と空想とが分化する時期でもある（Lewin, 1951）。将来の目標や願望に関するこれまでの研究において，中学生では，学年が上がるほど時間的展望の内容が空想的なものから現実的なものへと変化していくことが明らかにされている（Vestraeten, 1980）。このように，青年期においては，願望として持っているだけの実現不可能な空想の水準と，実際に努力すれば実現可能な予期の水準とが区別されて考えられるようになるといえる。特に大学生は，憧れのような未来を思い描くだけでなく，自己の可能性を考慮に入れながら，就職などの目標達成に向けて具体的な計画を立てたり，その計画に従って自分の行動を制御していく時期である。目標達成の可能性を考慮に入れた将来像としての予期か，あるいは理想や願望に基づいた空想かという観点は，このような時期にある大学生にとって重要であろう。

これまでの研究において，予期および空想はいくつかの方法で測定されてきた。先行研究においては，予期は，就職や異性との親密な関係の構築など，当該の目標達成可能性の見積もりの程度について1項目から3項目で測定されている（Oettingen & Mayer, 2002; Oettingen, Pak & Schnetter, 2001; Oettingen & Wadden, 1991）。一方，空想は，当該の目標に関するポジティブ（ネガティブ）な空想，考え，イメージを行う程度について，1項目で測定されている。また，Oettingen & Mayer（2002）では，目標達成に関わるあるストーリーを完成させることによって，どの程度空想を行っているのかを測定している。さらに，Oettingen（2000）では，目標の達成について考えたときに，心に浮かんだポジティブおよびネガティブな事柄をあげさせることによって，空想の程度を測定している。

これらの方法によって測定される予期および空想は，目標に対するコミットメントや実際の目標達成の程度を予測することが示されている（Oettingen & Mayer, 2002; Oettingen, Pak & Schnetter, 2001; Oettingen & Wadden, 1991）。予期は，目標へのコミットメントや高い水準での目標達成を促進する。一方，ポジティブな空想は，差し迫った問題からの回避的な思考であるために，目標へのコミットメントや目標達成を阻害する。このように，予期と空想は，動機づけに対して異なる影響を及ぼしており，目標達成に関する動機づけを予測するのに有効であると考えられる。

しかし，我が国においては，予期および空想を測定する尺度は開発されていない。また，Oettingen & Mayer（2002）の尺度においては，予期および空想を少数の項目で測定しており，安定した尺度とは言い難い。さらに，これらの尺度の信頼性，妥当性の検討も十分にはなされておらず，より精緻化された尺度を作成する必要があるだろう。

本研究では，大学生にとって重要なライフ・イベントである，就職に関する目標を取りあげることとする。職業生活への移行を目前とした大学生にとって，就職は非常に大きな目標であると考えられる。また，職業未決定などの問題にもあらわれているように，就職という目標にどのように関わっていくのかということは，大学生にとって重要な課題であると言えよう。

そこで，本研究では，就職に関する目標をとりあげ，我が国における予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想を測定する尺度の作成を目的とする。さらに，その信頼性と妥当性についても，あわせて検討を行う。

なお，本研究では，Oettingen & Mayer（2002）を参考に，予期を「将来の出来事の実現可能性についての判断を伴う，将来についての具体的な考え方であり，目標に関わるさまざまな要因を考慮して，目標を達成できるか否かについて考えること」と定義する。また，ポジティブ空想を「将来についての漠然としたポジティブなイメージであり，目標を達

成した理想的な自分について思い描くこと」と定義する。さらに，ネガティブ空想を「将来についての漠然としたネガティブなイメージであり，目標を達成していない否定的な自分について思い描くこと」と定義する。

予備調査１：予期尺度の項目の収集

目　的

予期を測定する尺度項目を収集することを目的とする。

方　法

調査時期　2003年５月であった。

調査対象者　茨城県内の国立大学生135名（男性67名，女性68名，平均年齢18.59歳（SD＝1.21））であった。

調査内容　「希望する職業につく」という目標の実現可能性をどのように見積もっているかを尋ねるために，「将来，自分が望むような職業につけると思うか」について，「はい」「いいえ」の２件法で尋ねた。次いで，なぜ将来望むような職業につける（あるいはつけない）と思うのかについて自由記述を求めた。

調査手続き　上記の質問紙を，授業の時間を利用して集団形式で行った。

結果と考察

予期を測定する項目を収集するために，自由記述によって得られた結果をKJ法によって分類した。なお，分類は，心理学を専門とする大学院生１名，および大学３年生４名で行った。得られた326個の記述について，以下の11個のカテゴリーに分類した。

第１は，「その職業につくだけの能力があるから」「自分は，（その仕事に必要とされる）力があるから」などの記述が含まれた。これは，目標達成に関わる能力についての記述であると考えられるので，「能力」とした。第２は，「その職業に向いているから」「ほかの人に，その職業に向いているといわれたから」などの記述が含まれた。これは，目標とする職業の適性についての記述であると考えられるので，「適性」とした。第３は，「応援してくれる人がいるから」「両親が支えてくれているから」などの記述が含まれた。これは，目標を達成しようとする自分をサポートしてくれる人についての記述であると考えられるので，「サポート」とした。第４は，「目標を達成するためにがんばろうと思っているから」「挫折してしまいそうだから」などの記述が含まれた。これは，目標達成のための努力についての記述であると考えられるので，「努力」とした。第５は，「私は運がいい方だから」「運がよければ就職できそう」などの記述が含まれた。これは，目標達成に関わる運の側面についての記述であると考えられるので，「運」と命名した。第６は，「（目標達成のために必要な）試験勉強をしようと思うから」「就職するために会社訪問やOB訪問をしようと思うから」などの記述が含まれていた。これは，目標達成の方法についての記述であると考えられるので，「方法」とした。第７は「（その職業につくための）試験が難しいから」「面接であがってしまいそうだから」などの記述が含まれていた。これは，目標達成の過程にある試験や面接に関わる記述であると考えられるので，「試験・面接」とした。第８は，「（その職業の）採用が少ないから」「不況だから，採用してくれなそう」などの記述が含まれていた。これは，その職業の採用数についての見積もりであると考えられるので，「採用数」とした。第９は，「その職業につくためには厳しい競争を勝ち上がらなければならないから」「倍率が高いから」などの記述が含まれていた。これは，目標達成に関わる他者との競争についての記述であると考えられるので，「競争」とした。第10は，「経済的理由や年齢的制限などで，夢をあきらめてしまいそうだから」「目標を達成するまでに多くの困難があるから」などの記述が含まれていた。これは，目標達成の過程にある困難や障壁についての記述であると考えられるので，「障壁・困難」とした。第11は，「どんなことがあっても，夢をあきらめないから」「何があってもその職業につくつもりだから」などの記述が含まれていた。これは，目標達成の意欲の継続についての記述であると考えられるので「意欲の継続」とした。

以上の結果から，予期を測定する11カテゴリー（「能力」「適性」「サポート」「努力」「運」「方法」「試験・面接」「採用数」「競争」「障壁・困難」「意欲の継続」）の尺度項目が収集された。

予備調査２：空想尺度の項目の収集

目　的

ポジティブ空想およびネガティブ空想を測定する

尺度項目を収集することを目的とする。

方　法

調査時期　2004年9月であった。

調査対象者　茨城県内の大学生197名（男性83名，女性114名，平均年齢19.73歳（SD＝1.58））であった。

調査内容　調査内容は以下の通りであった。

①ポジティブ空想：「毎日の生活において、就職に関して目標を達成したポジティブな自分を頭の中で思い描くことはありますか」と尋ね，「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。その上で「はい」と回答した人に対し，思い描いたポジティブな空想の内容について自由記述を求めた。

②ネガティブ空想：「毎日の生活において、就職に関して目標を達成していないネガティブな自分を頭の中で思い描くことはありますか」と尋ね，「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。その上で，「はい」と回答した人に対し，思い描いたネガティブな空想の内容について自由記述を求めた。

調査手続き　上記の質問紙を，授業の時間を利用して集団形式で行った。

結果と考察

ポジティブ空想とネガティブ空想を測定する項目を収集するために，自由記述によって得られた結果をKJ法によって分類した。なお，分類は，心理学を専門とする大学院生1名，および大学3年生4名で行った。得られた551個の記述について，以下の3個のカテゴリーに分類した。

第1は，「希望の職業につけた自分」「不採用となった自分」などの記述が含まれた。これは，就職・採用といった目標を達成した（あるいはしていない）自分についてのイメージであると考えられるので，「目標達成・目標未達成」とした。第2は，「希望の職業について活躍している自分」「仕事で失敗している自分」などの記述が含まれていた。これは，就職後に充実した（あるいはしていない）仕事をしている自分についてのイメージであると考えられるので，「就職後の状況」とした。第3は，「卒業後，楽しく生活している自分」「暗い生活を送っている自分」などの記述が含まれていた。これは，大学卒業後の生活全般についての記述であると考えられるので，「卒業後の生活」とした。

以上の結果から，ポジティブ空想およびネガティブ空想を測定する3カテゴリー（「目標達成・目標未達成」「就職後の状況」「卒業後の生活」）の尺度項目が収集された。

研究1：予期尺度，ポジティブ空想尺度，ネガティブ空想尺度の作成

目　的

予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想を測定する尺度を作成し，その信頼性を検討することを目的とする。

方　法

調査対象者　茨城県内の大学生342名（男性152名，女性187名，不明3名，平均年齢20.35歳（SD＝1.11））であった。なお，学年の内訳は，1年生53名，2年生177名，3年生99名，4年生11名であった。

調査時期　2005年1月～2月であった。

調査内容　調査内容は以下の通りであった。

①就職状況について：就職に関する現在の状況について，就職先が決まっている（内定をもらっている）のか，まだ就職先が決まっていないのかを尋ねた。

②目標の内容について：「あなたは将来どのような職業につきたいと思っていますか」と尋ね，自由記述を求めた。なお，具体的に目標が決まっていない人については，漠然とした目標（例.「自分にあった職業」「やりがいのある職業」など）についての記述を求めた。

③予期尺度：予備調査1をもとに11個の予期を測定する項目を作成した。これに，Oettingen & Mayer（2002）を参考に作成した2項目（「将来，希望する職業につくことができる」「将来，目標を達成できる可能性が高い」）を加えた計13項目について，「全くそう思わない」「どちらかといえばそう思わない」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思う」「非常にそう思う」の5件法で回答を求めた。

④ポジティブ空想尺度：予備調査2をもとに，10個のポジティブ空想を測定する項目を作成した。「全くない」「あまりない」「どちらともいえない」「わりとそうである」「非常に頻繁にそうである」の5件法で回答を求めた。

⑤ネガティブ空想尺度：予備調査2をもとに，10個のネガティブ空想を測定する項目を作成した。「全くない」「あまりない」「どちらともいえない」

「わりとそうである」「非常に頻繁にそうである」の5件法で回答を求めた。

⑥先行研究での予期項目：Oettingen & Mayer (2002) で使用された予期を尋ねる項目をできるだけ忠実に日本語に翻訳したものを使用した（「あなたは将来，どの程度の確率でその目標を達成できると思いますか」）。「非常に確率が低い」から「非常に確率が高い」までの10件法であった。

⑦先行研究でのポジティブ空想項目：Oettingen & Mayer (2002) で使用されたポジティブ空想を尋ねる項目をできるだけ忠実に日本語に翻訳したものを使用した（「あなたはどの程度頻繁に，毎日の生活の中で，仕事がある生活への移行，大学の卒業，職を探し見つかったことに関するポジティブな考え，イメージ，あるいは空想を経験しますか」）。「全く空想しない」から「非常に空想する」までの10件法であった。

⑧先行研究でのネガティブ空想項目：Oettingen & Mayer (2002) で使用されたネガティブ空想を尋ねる項目をできるだけ忠実に日本語に翻訳したものを使用した（「あなたはどの程度頻繁に，毎日の生活の中で，仕事がある生活への移行，大学の卒業，職を探し見つかったことに関するネガティブな考え，イメージ，あるいは空想を経験しますか」）。「全く空想しない」から「非常に空想する」までの10件法であった。

調査手続き　上記の質問紙を，授業の時間を利用して集団形式で行った。

結果と考察

本研究では，就職に関する目標について検討するものであり，まだ目標を達成していない（就職が決まっていない）人を対象とする必要がある。したがって，就職状況についての質問項目において，「すでに就職が決まっている」と回答した2名を分析から除くこととした。

（1）予期尺度の作成

はじめに，分布に偏りが見られた2項目（「希望する職業につくための競争率は高い」「希望の職業につくまでには，多くの困難や障壁がある」）を削除した。その後，11項目について，先行研究の予期項目との相関係数を算出した（$r = -.06 \sim .59$）。相関係数が有意でなかった2項目（「就職のための試験や面接は，私にとって難易度が高い」（$r = -.06$, *n.s.*），「その職業では広く採用（求人）を行っている」（$r = .09$, *n.s.*））を削除した。

以上の過程を経て，残った9項目について因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。その結果，1つの因子が抽出された（Table 1）。そこで，この9項目を予期尺度の項目として採用し，9項目の平均値を予期得点とした。なお，各項目および予期得点の平均値と標準偏差を Table 1 に示す。

（2）ポジティブ空想尺度の作成

すべての項目において分布に偏りが見られなかったので，この10項目について，先行研究のポジティブ空想項目との相関係数を算出した。その結果，すべての項目で有意な相関が示された（$r = .44 \sim .58$, $p < .001$）。そこで，この10項目について，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行ったところ，1つの因子が抽出された（Table 2）。そこで，この10項目をポジティブ空想尺度の項目として採用し，10項目の平均値をポジティブ空想得点とした。なお，各項目およびポジティブ空想得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。

Table 1　予期尺度の因子分析結果および平均値，標準偏差

項目番号	項目	F1	h^2	平均値	*SD*
予期3	私には，目標を達成するための能力がある	.80	.64	3.51	.90
予期1	将来，希望する職業につくことができる	.80	.63	3.68	.82
予期2	将来，目標を達成できる可能性が高い	.74	.55	3.53	.87
予期11	目標を達成する過程にある困難や障害をのりこえられる	.67	.44	3.78	.77
予期5	私には，希望する職業に対する適性がある	.62	.38	3.60	.90
予期4	夢を実現させるだけの運を持っている	.60	.36	3.32	1.07
予期7	私は，目標を達成するために，努力できる	.54	.29	4.09	.85
予期6	目標達成の手助けをしてくれる人がいる	.51	.26	3.62	1.03
予期9	希望する職業につくためにはどうしたらよいか，そのコツを知っている	.43	.18	2.40	.99
	予期得点			3.50	.61

(3) ネガティブ空想尺度の作成

すべての項目において分布に偏りが見られなかったので，この10項目について，先行研究のネガティブ空想項目との相関係数を算出した。その結果，すべての項目で有意な相関が示された（r =.48～.62, p <.001)。そこで，この10項目について，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行ったところ，1つの因子が抽出された（Table 3）。そこで，この10項目をネガティブ空想尺度の項目として採用し，10項目の平均値をネガティブ空想得点とした。なお，各項目およびネガティブ空想得点の平均値と標準偏差を Table 3 に示す。

(4) 予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想の関連

予期得点，ポジティブ空想得点およびネガティブ空想得点の関連を検討するために，各得点の相関係数を算出した。その結果，予期はポジティブ空想と正の関連（r =.64, p <.001)，ネガティブ空想と負の関連（r =−.45, p <.001）を示した。また，ポジティブ空想とネガティブ空想は負の関連（r =−.27, p <.001）を示した。

本研究においては，予期とポジティブ空想との間に，強い相関が示された。これは，予期とポジティブ空想がそれぞれ独立して存在するのではないという可能性を示している。将来についてのよいイメージを形成する中で，その将来が達成可能であるか否かを判断できるようになるとも考えられる。予期と空想がどのような関係にあるのかについて，今後，さらに検討していく必要があるだろう。

(5) 信頼性の検討

予期尺度，ポジティブ空想尺度，ネガティブ空想尺度の内的一貫性を検討したところ，それぞれ α =.85, α =.93, α =.93であった。

2週間後の再検査信頼性を検討したところ，予期

Table 2　ポジティブ空想尺度の因子分析結果および平均値，標準偏差

項目番号	項目	F1	h^2	平均値	*SD*
ポ空想4	希望の職業につくことができた自分をイメージする	.85	.72	3.74	.96
ポ空想6	就職に関して，夢がかなった自分を思いうかべる	.84	.70	3.64	1.02
ポ空想3	就職後，仕事で活躍している自分を想像する	.82	.68	3.72	.99
ポ空想1	目標を達成できた自分を思いうかべる	.80	.63	3.70	.97
ポ空想7	就職後，仕事に充実感を感じている自分を想像する	.79	.62	3.70	1.02
ポ空想2	希望の職場に採用となった自分を想像する	.79	.62	3.60	1.04
ポ空想5	就職後，仕事で他者から認められている自分の姿を想像する	.75	.57	3.31	1.08
ポ空想8	就職できた自分を思いうかべる	.71	.50	3.72	1.05
ポ空想9	大学（大学院）卒業後の明るい生活を思いうかべる	.65	.42	3.46	1.07
ポ空想10	周囲の人から取り残されずに，就職を決めることができた自分の姿を思いうかべる	.58	.33	3.14	1.14
	ポジティブ空想得点			3.57	.80

Table 3　ネガティブ空想尺度の因子分析結果および平均値，標準偏差

項目番号	項目	F1	h^2	平均値	*SD*
ネ空想6	就職に関して，夢がやぶれた自分を思いうかべる	.85	.72	2.27	1.11
ネ空想4	希望の職業につくことができなかった自分をイメージする	.83	.69	2.49	1.09
ネ空想9	大学（大学院）卒業後の暗い生活を思いうかべる	.75	.57	2.01	1.05
ネ空想1	目標を達成できなかった自分を思いうかべる	.75	.56	2.47	1.10
ネ空想2	希望の職場に不採用となった自分を想像する	.73	.53	2.32	1.10
ネ空想10	就職が決まっていく周囲の人から取り残されてしまった自分の姿を思いうかべる	.73	.53	2.25	1.16
ネ空想5	就職後，仕事で他者から認められていない自分をイメージする	.72	.52	2.23	1.03
ネ空想3	就職後，仕事がうまくいっていない自分を想像する	.70	.50	2.41	1.14
ネ空想7	就職後，仕事に空虚感を感じている自分を想像する	.65	.42	2.14	1.11
ネ空想8	就職できないでいる自分を思いうかべる	.65	.42	2.48	1.21
	ネガティブ空想得点			2.31	.85

の相関はr =.58（p <.001），ポジティブ空想の相関はr =.70（p <.001），ネガティブ空想の相関はr =.63（p <.001）であった。

以上の結果から，十分な信頼性が確認された。

（6）予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想の性差の検討

予期得点，ポジティブ空想得点，ネガティブ空想得点の性差を検討するために，t検定を行った（Table 4）。その結果，予期においては，女性よりも男性のほうが高かった。また，ネガティブ空想においては，男性よりも女性のほうが高かった。ポジティブ空想に関しては，有意な差は見られなかった。

以上の結果より，男性は女性よりも目標の達成の可能性を高く見積もっていること，女性は男性よりも目標を達成できなかったネガティブな自分について頻繁にイメージすることが示された。現在の社会的状況を考えると，女性に対しても就職の場が比較的開かれてきているとはいえ，男性よりも女性の方が，就職について厳しい状況にあると考えられる。このような社会的状況から，男性よりも女性の方が，目標達成の可能性を低く見積もっていると考えられる。また，一般的に，男性よりも女性の方が不安傾向が高いと考えられる。先述した社会的状況や不安傾向の高さから，女性は，目標を達成できなかったネガティブな自分の姿について頻繁にイメージする傾向にあると考えられる。

（7）予期，ポジティブ空想、ネガティブ空想の学年差の検討

予期得点，ポジティブ空想得点，ネガティブ空想得点の学年差を検討するために，分散分析を行った（Table 5）。なお，4年生はサンプル数が少なかったために，分析から除外した。分散分析の結果，ネガティブ空想において，有意な差が認められた。多重比較（Tukey法）の結果，3年生は2年生よりもネガティブ空想が高いことが示された。予期およびポジティブ空想においては有意な差は認められなかった。

以上の結果より，3年生は2年生よりも目標を達成できなかったネガティブな自分を頻繁にイメージすることが示された。しかし，3年生は，単に就職についてのイメージがネガティブになるのではなく，1，2年生と同程度に目標達成の可能性を見積もり，また，目標を達成した理想的な自分についてイメージしていた。以上のことから考えると，3年生は，就職という目標についての望ましいイメージだけではなく，望ましくないイメージも同時に持てるようになると考えられる。1，2年生は，就職までまだ時間がある時期である。しかし，3年生の1～2月は，具体的に就職活動を行ったり，情報の収集をしたりする時期である。目標達成までの時間的切迫に加え，目標達成のために具体的な行動をおこすことによって，「こうなりたい」というイメージだけではなく，「こうはなりたくない」というイメージもより明確になってくるものと考えられる。

Table 4　予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想の性差（t検定結果）

	男性（n =148）		女性（n =186）		t値	性差
	平均値	*SD*	平均値	*SD*		
予期	3.59	.63	3.43	.59	2.36*	男＞女
ポジティブ空想	3.60	.82	3.55	.80	.61	*n.s.*
ネガティブ空想	2.19	.83	2.41	.86	2.34*	男＜女

注）*p <.05。

Table 5　予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想の学年差（分散分析結果）

	1年生（n =52）		2年生（n =174）		3年生（n =98）		F値	学年差
	平均値	*SD*	平均値	*SD*	平均値	*SD*		
予期	3.40	.57	3.49	.60	3.54	.65	.93	*n.s.*
ポジティブ空想	3.56	.85	3.51	.79	3.67	.80	1.39	*n.s.*
ネガティブ空想	2.24	.82	2.24	.92	2.50	.86	3.16*	2年＜3年

注）*p <.05。

研究2：予期尺度，ポジティブ空想尺度，ネガティブ空想尺度の妥当性の検討

目　的

研究1で作成された予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想尺度の妥当性の検討を行うことを目的とする。

予期尺度の妥当性の検討には，進路選択に対する自己効力感尺度（浦上，1995）を用いる。予期は，ある行動をとることができるか否か（self-efficacy expectations），ある行動が望ましい結果を導くか否か（outcome expectations），ある出来事が生じるか否か（general expectations），一般的に未来がポジティブかネガティブか（generalized expectations）によって概念化されていると考えられている（Oettingen & Mayer，2002）。予期が，目標達成の可能性についての判断であることを考えると，どの程度適切に進路選択に必要な行動を行うことができるかについての見積もりである進路選択に対する自己効力感と関連を持つと考えられる。したがって，予期と自己効力感とは正の関連を示すであろう。なお，先行研究で使用された項目との関連を確認するために，Oettingen & Mayer（2002）で使用された予期項目との関連もあわせて検討する。

ポジティブ空想尺度およびネガティブ空想尺度の妥当性の検討には，楽観主義尺度（高良・中村，1993）を用いる。楽観主義がものごとをよい方向で考える傾向であることを考えると，将来についてのポジティブあるいはネガティブなイメージである空想と関連を持つと考えられる。したがって，ポジティブ空想と楽観主義は正の関連，ネガティブ空想と楽観主義は負の関連を示すであろう。なお，先行研究で使用された項目との関連を確認するために，Oettingen & Mayer（2002）で使用されたポジティブ空想項目とネガティブ空想項目との関連もあわせて検討する。

方　法

調査対象者　茨城県内の大学生342名（男性152名，女性187名，不明3名，平均年齢20.35歳（SD＝1.11））であった。なお，これは研究1の調査対象者と同様であった。このうち，予期尺度の妥当性の検討においては，大学生172名（男78名，女93名，不明1名，平均年齢20.32歳）が対象となった。また，ポジティブ空想尺度およびネガティブ空想尺度の妥当性の検討においては，大学生170名（男性74名，女性94名，不明2名，平均年齢20.39歳）が対象となった。

調査時期　2005年1月～2月であった。

調査内容　調査内容は以下の通りであった。

①予期尺度：研究1で作成された9項目。「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5件法であった。

②ポジティブ空想尺度：研究1で作成された10項目。「全くない」から「非常に頻繁にそうである」までの5件法であった。

③ネガティブ空想尺度：研究1で作成された10項目。「全くない」から「非常に頻繁にそうである」までの5件法であった。

④進路選択に対する自己効力感尺度：予期尺度の妥当性の検討を行うため，浦上（1995）が作成した尺度を用いた。この尺度は，進路を選択する過程で必要な行動に対する遂行可能感である進路選択に対する自己効力を測定することができる。進路を選択する過程で必要なことがらに関する30項目（例.「将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること」「自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を知ること」）であった。その行動を行うことに対してどの程度自信があるかについて，「全く自信がない場合」から「非常に自信がある場合」までの4件法であった。

⑤楽観主義尺度：ポジティブ空想尺度およびネガティブ空想尺度の妥当性の検討を行うため，高良・中村（1993）が作成した尺度を用いた。この尺度は，ものごとをポジティブな方向で考える楽観的自己感情因子と，ものごとをネガティブな方向で考える悲観的自己感情因子の2因子からなる。フィラー項目を含めた12個の項目（例.「いつもものごとの明るい面を考える（楽観）」，「自分に都合良くことが運ぶだろうなどとは期待しない（悲観）」）について，「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法で尋ねた。

⑥先行研究での予期項目：Oettingen & Mayer（2002）で使用された予期を尋ねる項目をできるだけ忠実に日本語に翻訳したものを使用した。「非常に確率が低い」から「非常に確率が高い」までの10件法であった。

⑦先行研究でのポジティブ空想項目：Oettingen & Mayer（2002）で使用されたポジティブ空想を尋ねる項目をできるだけ忠実に日本語に翻訳したものを使用した。「全く空想しない」から「非常に空想する」までの10件法であった。

⑧先行研究でのネガティブ空想項目：Oettingen & Mayer（2002）で使用されたネガティブ空想を尋

ねる項目をできるだけ忠実に日本語に翻訳したものを使用した。「全く空想しない」から「非常に空想する」までの10件法であった。

結果と考察

（1）各尺度の記述統計量

進路選択に対する自己効力感尺度　浦上（1995）に従い，30項目の平均値を進路選択に対する自己効力感得点とした。平均値と標準偏差を Table 6 に示す。

楽観性尺度　高良ら（2000）に従い，楽観的自己感情下位尺度に含まれる3項目，および，悲観的自己感情下位尺度に含まれる4項目の平均値を，それぞれ，楽観的自己感情得点，悲観的自己感情得点とした。平均値と標準偏差を Table 6 に示す。

先行研究での予期項目　先行研究での予期項目の平均値と標準偏差を Table 6 に示す。

先行研究でのポジティブ空想項目およびネガティブ空想項目　先行研究でのポジティブ空想項目およびネガティブ空想項目の平均値と標準偏差を Table 6 に示す。

（2）予期尺度の妥当性の検討

予期尺度の妥当性の検討のために，予期得点と進路選択に対する自己効力感得点との相関係数を求めた（Table 7）。また，先行研究での予期項目との関連を確認するため，予期得点と先行研究での予期項目との相関係数を求めた（Table 7）。その結果，予期得点と進路選択に対する自己効力感得点との間に正の関連が示された。また，予期得点と先行研究での予期項目との間に正の関連が示された。

以上の結果より，予期尺度の十分な妥当性が検証された。

Table 6　職業選択に対する自己効力感尺度，楽観主義尺度，先行研究での予期および空想項目の平均値と標準偏差

		平均値	*SD*
進路選択に対する自己効力感		2.78	.47
楽観主義	楽観的自己感情	3.09	.99
	悲観的自己感情	2.90	.78
先行研究	予期項目	6.47	2.09
	ポジティブ空想項目	6.99	1.96
	ネガティブ空想項目	5.29	2.35

（3）ポジティブ空想尺度の妥当性の検討

ポジティブ空想尺度の妥当性の検討のために，ポジティブ空想得点と楽観主義尺度との相関係数を求めた（Table 7）。また，先行研究でのポジティブ空想項目との関連を確認するため，ポジティブ空想得点と先行研究でのポジティブ空想項目との相関係数を求めた（Table 7）。その結果，ポジティブ空想得点と楽観主義尺度との関連においては，楽観的自己感情得点との間に正の関連，悲観的自己感情得点との間に負の関連が示された。また，ポジティブ空想得点と先行研究でのポジティブ空想項目との間に正の関連が示された。

以上の結果より，ポジティブ空想尺度の十分な妥当性が検証された。

（4）ネガティブ空想尺度の妥当性の検討

ネガティブ空想尺度の妥当性の検討のために，ネガティブ空想得点と楽観主義尺度との相関係数を求めた（Table 7）。また，先行研究でのネガティブ空想項目との関連を確認するため，ネガティブ空想得点と先行研究でのネガティブ空想項目との相関係数を求めた（Table 7）。その結果，ネガティブ空想得点と楽観主義尺度との関連においては，楽観的自己感情得点との間に負の関連，悲観的自己感情得点との間に正の関連が示された。また，ネガティブ空想得点と先行研究でのネガティブ空想項目との間に正の関連が示された。

以上の結果より，ネガティブ空想尺度の十分な妥当性が検証された。

Table 7　予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想と各尺度の相関係数

	進路選択に対する自己効力感	楽観性尺度		先行研究		
		楽観的自己感情	悲観的自己感情	予期項目	Po空想項目	Ne空想項目
予期	.72***	.42***	−.37***	.57***	.57***	−.46***
ポジティブ空想	.61***	.28***	−.29***	.35***	.62***	−.29***
ネガティブ空想	−.37***	−.44***	.32***	−.34***	−.37***	.70***

注）Po 空想はポジティブ空想，Ne 空想はネガティブ空想を示す。
注）*p <.001。

全体的考察

本研究では，就職に関する，予期，ポジティブ空想，ネガティブ空想を測定する尺度を作成し，その信頼性と妥当性の検討をすることを目的とした。

予備調査から得られた自由記述の分類，因子分析を経て，9項目からなる予期尺度，各10項目からなるポジティブ空想尺度およびネガティブ空想尺度を作成した。信頼性，妥当性の検討を行った結果，十分な信頼性と妥当性が確認された。

本尺度は，青年とって非常に重要なライフ・イベントであると考えられる就職に関する予期および空想を測定することができる。予期および空想が，目標達成へのコミットメントの程度や，実際のパフォーマンスを予測しうる（Oettengen & Mayer, 2002）ことを考慮すると，本尺度は，青年が職業生活へ移行していく過程で持つ職業未決定や就職への不安といった問題を考える上でも有用であると言える。

一方で，本尺度においては，問題点もあると考えられる。本研究において，予期とポジティブ空想との間に高い相関が示された。このことは，予期とポジティブ空想が，それぞれ独立して存在するのではないという可能性を示しているとも考えられる。予期と空想がそれぞれどのような関連を持っているのかについて，より詳細に検討していく必要があるだろう。

また，本研究では大学生のみを対象として検討を行っている。中学生や高校生における就職に対する意識について注目されている（竹内・坂柳，1983）ことを考慮すると，中学生，高校生も含めた検討も必要であろう。

謝　辞

本研究においては，大学生の方々に質問紙調査にご協力頂きました。ご協力下さいました方々に心より御礼申し上げます。また，筑波大学第二学群人間学類の石川一輝さん，勝見太一さん，高坂春菜さん，杉有香さんには，多大なるご協力を頂きました。深く御礼申し上げます。

引用文献

Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.

Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: Selected papers on group dynamics*. New York: Harper & Brothers.（猪股佐登留訳　1979　社会科学における場の理論（増補版）誠信書房）

Mischel, W. (1973). Toward a cognitive social learning reconceptualization of personality. *Psychological Review*, **80**, 252-283.

Mischel, W., Cantor, N. & Feldman, S. (1996). Principles of self-regulation: The nature of willpower and self-control. In E.T. Higgins & A.W. Kruglanski (Eds.), *Social Psychology: Handbook of basic principles* (Pp.329-360). New York: Guilford Press.

Oettingen, G. (2000). Expectancy effects on behavior depend on self regulatory thought. *Social Cognition*, **18**, 101-129.

Oettingen, G. & Mayer, D. (2002). The motivating function of thinking about the future: Expectations versus fantasies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 5, 1198-1212.

Oettingen, G., Pak, H. & Schnetter, K. (2001). Self-regulation of goal setting: Turning free fantasies about the future into binding goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 5, 736-753.

Oettingen, G. & Wadden, T. (1991). Expectation, fantasy, and weight loss: Is the impact of positive thinking always positive? Cognitive Theory and Research, **15**, 2, 167-175.

Olson, J.M., Roese, N.J. & Zanna, M.P. (1996). Expectations In E.T. Higgins & A.W. Kruglanski (Eds.), *Social Psychology: Handbook of basic principles* (Pp.329-360). New York: Guilford Press.

高良美樹・中村陽吉（1993）．対人行動に関わる既存の個別的パーソナリティ尺度の検討（1）－関係の分析の枠組み　日本グループダイナミックス学会第41回大会発表論文集，170-171.

竹内登規夫・坂柳恒夫（1983）．進路成熟態度尺度（CMAS-2）の作成と分析　愛知教育大学研究報告（教育科学編），**32**，193-208.

浦上昌則（1995）．学生の進路選択に対する自己効力に関する研究　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学偏），**42**，115-126.

Vestraeten, D. (1980). Level of realism in adolescent future time perspective. *Human evelopment*, **23**, 177-191.

（受稿3月22日：受理5月18日）